

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 29 回 2 月に北方の島々を想う

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

2 月 7 日付『産経新聞』1 面。前日にトルコで起きた<sup>マグニチュード</sup>M 7.8 の巨大地震での救助活動を報じる写真の横に、青黒い海から青空に向かって斜めに建つ白い<sup>とう</sup>塔の寒そうな写真が載っていました。わが国固有の領土である北海道・<sup>はぽまいぐんとう</sup>歯舞群島の<sup>かいがらじま</sup>貝殻島に立つ灯台です。貝殻島は最も高い所の標高が数メートルなので、<sup>ねむろ</sup>根室半島の<sup>のさつぷみさき</sup>納沙布岬から見ると、灯台がまるで海から直接生えているように見えます。

この灯台は 1937 年、根室や<sup>しべつ</sup>標津など、<sup>どうとう</sup>道東（北海道東部地域）地区の漁船が港と漁場の間を出入りする際に通る<sup>ごようまいすいどう</sup>瑤瑠水道と呼ばれる狭い<sup>かいきょう</sup>海峡の交通の安全を守るために日本が設置しました。1872 年に建設された日本最古の灯台がある納沙布岬から貝殻島まではわずか 3.7 ㎞の距離で向かい合っています。

灯台が傾いているのは、この島が<sup>だいとうあせんそう</sup>大東亜戦争終結後の 1945 年以來、ソ連（現・ロシア）に不法<sup>せんきよ</sup>占拠されていて日本人が自由に上陸できず、灯台の保守管理が行われていないためです。コンクリート製の建物が<sup>く</sup>朽ちてきている様子が、納沙布岬にある「<sup>ぼうきょう</sup>望郷の家」などからも手に取るように見ることができます。

「望郷の家」は、1945 年以來ソ連が占拠している<sup>えとろふ</sup>択捉、<sup>くなしり</sup>国後、<sup>しこたん</sup>色丹、<sup>しこたん</sup>歯舞の 4 島（歯舞は小さな島々で構成する群島）からなる北方領土の復帰促進のため、1972 年に、北方領土の元住民で構成する千島歯舞諸島居住者連盟が設置し、現在は根室市が管理しています。晴れている日にはここから北方領土の島々が見渡せ、<sup>きり</sup>霧で海上が見えない時でも、様々な資料で北方 4 島の歴史や現状を知ることができます。

なんでこの話を書いたかという、2 月 7 日が「北方領土の日」だからです。

大東亜戦争で日本が負け受け入れ、1945 年 8 月 15 日に終戦となり、日本軍が武装解除した後の 8 月末から 9 月にかけて、ソ連軍が北方 4 島を攻撃しました。<sup>とうみん</sup>島民たちは北海道の<sup>ねむろ</sup>根室や<sup>らうす</sup>羅臼に

小舟で逃げてきましたが、逃げ遅れた人たちの多くはソ連軍に捕まり、樺太（サハリン）やシベリアに連れて行かれ、長いこと北海道にも帰れませんでした。当時、日本とソ連の間には不可侵条約がありました。米軍が2発目の原子爆弾を長崎に投下した8月9日、日本の敗戦は時間の問題でしたが、ソ連は一方的にこの条約を破棄し、日本が管理していた満州（中国東北部）や南樺太、そして千島列島から日本固有の領土・北方領土に侵攻してきました。まるで、現在のロシア軍によるアフガニスタン侵攻のようです。

武力による他国領土への侵攻は「領土不拡大」をうたった大西洋憲章（1941年）や、カイロ宣言（1943年）に違反しています。北海道、本州、四国、九州とその付属諸島の多くは終戦後も日本領土のままでしたし、米国に占領されていた沖縄、奄美、小笠原諸島なども1972年までにすべて返還されました。しかし、日本固有の領土である北方4島を占拠したソ連とその承継国のロシアは終戦から78年後の今日まで領土返還に応じていません。

1855年、北方4島が日本の領土だとお互いに確認した日露通好条約を日本がソ連の前身のロシア帝国との間で調印した2月7日を、わが国では「北方領土の日」と定め、1981年以来毎年、政府と関係団体が東京都内で「北方領土返還要求全国大会」を開催しています。今年の大会では、岸田文雄首相が「ロシアによるウクライナ侵略によって日露関係は厳しい状況にある。領土問題を解決し、平和条約を締結する方針を堅持する」などと述べました。

1991年の日ソ共同宣言で北海道に住む元島民らが墓参や地元住民との交流のために4島を訪れるビザなし渡航が始まりました。筆者は2006年7月の北方墓参で色丹島と歯舞群島の志発島、2008年5月のビザなし交流で択捉島に行った訪問団に同行しました。択捉島の帰りには、国後島で行った入出域手続きの取材もしたので、2年間で4島すべてに行ったことになります。

色丹島、志発島では地元の方にはほとんど会いませんでしたが、ロシアの国境警備隊の皆さんが日本人墓地の墓標や墓石を綺麗に磨き、草刈りなどもしてくれていました。一方、択捉島の紗那で行った日露両住民の交流会で、日本人元島民が「私たちの故郷なので気軽に島に帰れるよ

うにしてほしい」と言ったのに対し、ロシア側住民は「私たちもすでに親子4代にわたってここに住んでいる。大陸に故郷はないし、ここ以外に住むところはない」と言っていたのが印象的でした。あまりにも長い月日が流れています。

当時のロシアはプーチン大統領が首相に退き、メドベージェフ大統領の時代でした。その後、再び大統領に復帰したプーチン氏は安倍晋三<sup>あべ しんぞう</sup>首相との間で北方領土での共同経済活動を行うことなどを決めましたが、他国に領土を割譲<sup>かつじょう</sup>しないとすロシア憲法改正も行われませんでした。

2020年の新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）をきっかけにビザなし交流の枠組みは凍結され、今日に至っています。2022年2月、ロシア軍によるウクライナ侵攻が始まり、日本がロシアに経済制裁を発動すると、プーチン政権は日本を非友好国に指定し、「ビザなし交流の枠組みは廃止し、日露平和条約締結交渉は行わない」と一方的に通告してきました。

ロシアから来られている留学生の皆さんには耳が痛い話かもしれませんが、これが北方領土の現実なのです。

ソ連時代の1970年代、北方領土はソ連にとっても地の果てで、そこにいる国境警備隊の人たちは、物資不足で、日本の漁民たちに北海道で発行されている新聞や日本製の露文タイプライターを届けさせて自分の成果として上司に渡して賞金を受け取り、その見返りとして、日本漁船に北方領土水域での密漁を認めていました。ところが、サハリン1、サハリン2などで石油や天然ガスが産出されると、北方4島を管轄<sup>かんかつかつ</sup>するサハリン州はロシア中で一番裕福な地域になってきました。ロシア政府も数年間で数百億円を投入して4島に空港や港湾を整備し、住みやすい島々に改造、最近では配備された軍隊も演習を繰り返しています。

ロシアは不法占拠どころか実効支配を着々と強めており、ウクライナ侵攻の行方次第ですが、コロナ禍をきっかけに断絶した日露関係の修復にはこれまで以上のエネルギーが必要です。

今月から開かれている通常国会の衆議院予算委員会の答弁<sup>とうべん</sup>などで、岸田首相は今年5月に広島で予定されているG7サミット（主要国首脳会議）では、「力による現状変更は認められない」として、ウクライナ侵攻非難を取りまとめる考えを強調しています。力による国境線の変更は北方領土も全く同じです。ウクライナのゼレンスキー大統領も昨年10月、「北方領土はロシアの占領下におかれているが、ロシアにはそこに何の権利もない。私たちはもはや行動すべきだ」とする大統領令に署名し、「ウクライナと北方領土は同じだ」との考えを表明しました。

コロナ禍に対応しているうちに、世界は大きく変わろうとしています。筆者は昨年2月の本稿で、2月11日の建国記念の日と23日の天皇誕生日を挙げ、「日本国民にとって2月は特別な月」と書きましたが、7日の「北方領土の日」も、日本の行方と国民生活を考えるうえで、大変重要な日と言えるでしょう。北方4島では1945年8月には1万7291人が住んでいましたが、納沙布岬に「望郷の家」を設置した千島歯舞諸島居住者連盟によると、昨年末現在の元島民は3分の1以下の5,332人に減少し、平均年齢は87.2歳に達しています。その人たちは自分たちの故郷の土

を踏めるのでしょうか。

北方領土返還は、ポストコロナの日本社会で避けては通れない問題なのです。